

団子婿・松江市八雲町市場

令和3年6月29日掲載予定

収録・解説・酒井 董美<sup>たによし</sup> イラスト・福本 隆男



語り手 稲垣カズコさん  
(明治39年生まれ)  
収録・平成3年11月16日

あらすじ

昔、だらず婿がいた。また山の山の奥の方の一軒屋で呼ばれえことになって、川には橋はなかって、飛石を渡ってびよんこびよんこ跳んで呼ばれて行くことだけん、たいへんはずんで行きなげな。そしてお膳が出たら、大きなお椀にお団子がいっぱい入れて、そうして、豆の入った、今でいうぜんざいのごとで、「まい」と言つて何にも例えられんほどまいご馳走だったげな。

そうから、「いんだら忘れんやにかかさんにこさえてもらわなけんがなあ」と、まことに団子のごとばっかあ思つておつたげな。「今日は何て言つていい日だったやら、一番好きな団子のご馳走呼ばれて、こら忘れんやにいんで言わんなんけん」と、ま、そここの家の人に礼の一つも言わならんに。そうからいよいよ別れて自分のとこへいなんならんに、駆けつてその飛石をびよんこびよんこびよん渡りよつたら、

「団子」てことが頭から忘れてしまつて、「困つたなあ。どげだつたかいなあ」て考ええだどもなかなか「団子」てことが言われん。いろいろ考えたども、どうもしやんとしたことが分からん。そうから、わが家、もどつて、「今もどつたわ」て言つたら、そこのおかかが出て、「もどつたか。ご馳走があつたらがの。何のご馳走になつたや」「はあー」ごのご馳走になつたで、「ご」のだけ言つたて何のごとだいな分からんがな。どぎやんもんだつた。」あんまり、かか責めえもんだけん、「ああ、あげだつた。ヒョンゴ、ご馳走になつた」「ふーん、そらまた変わったことだなあ。どげなもんだつたかい」「どげもこげもねえわい。ヒョンゴのご馳走になつた。」そうしたら、かかさんが怒つて、け、そこに火を吹く吹き竹があつたやつ取つて、「こいんばかめが、ほんに。だらくそにもほどがああ」てつて、その吹き竹でけえ、頭をツツカーンとこうたたいたげな。そげしたら、

「やーあ、痛かつた。こな、かかさん、たいてい知れたもんだがの。言われんつてたてて言つちようにかあに。はーあ、痛かつた、痛かつた。まーあ……、あら、まあここに団子みたいな瘤が出たがの、まあ、かかさん、こらあ。ここ見てごつさい」て言つた。「はあ、ほんだつたなあ。そーらまあ団子より大つきな瘤だがなあ。」「あつ、あげだつた団子のご馳走だつた」てつて、だらず婿がそこで初めて分かつたということ、こつぽり。

解説

どなたもこれまでどこかで聴かれたことのある、懐かしい昔話だと思われる。ただここで婿が「ご」と誤つて言うところは、地方によつて「ピットコシヨ」「ヒョンゴ」など表現されているようである。関敬吾『日本昔話大成』によれば、笑話の「愚人譚」、「愚か賀(息子)」の中に「団子賀」として、この話型が登録されている。山陰地方ではこれらを佐治谷話として語られている場合も多い。(元島根大学法文学部教授)

